

社会インフラツアーにおける土木遺産の活用とその効果に関する研究 (その3)

—平成30年度土木遺産ツアー報告—

A study on the effect of the civil engineering heritage in social infrastructure tour (part3)

(一社)北海道開発技術センター ○正 員 原口征人 (Masato Haraguchi)
 北海道教育大学教育学部札幌校 正 員 今 尚之 (Naoyuki Kon)
 日本データサービス株式会社 石川成昭 (Shigeaki Ishikawa)
 (国研)土木研究所寒地土木研究所 正 員 岩田圭佑 (Keisuke Iwata)

1. はじめに—なぜ社会インフラツアーが必要か

北海道は自然と人間のせめぎ合いが150年近く続く土地である。インフラ投資をやめれば、すぐに自然に帰すことは、地方部の放棄された町が森に戻っていく姿をみれば、良く分かる。我々土木技術者の目標は、未来永劫、北海道のインフラが機能し続け、人々が住み続けられる土地に出来るか、にある。ここで北海道の建設会社の若手人材不足は相当に深刻である。国土強靱化には優秀な人材がこの業界に入ってくれること、末端まで人材が行き渡ることが重要である。そのためには、社会一般で土木の果たしている役割、これまでの技術開発や投資の成果をきちんと認識してもらい大事な仕事だと、社会通念に浸透することが重要であり、現在は様々な土木業界のマイナスイメージが先行して、若人が門戸をくぐってくれない状況にある。社会インフラツアーは、その意識変容のきっかけを提供する活動であり、どう面白く学ぶよう仕組んでいくかが大切となってくる。

本論考はその実践的な内容となっている。

2. インフラツアーを取り巻く北海道の状況

国土交通省北海道開発局では第8期総合開発計画のなかで、目標の一つに「人が輝く地域社会」、その主要施策として「多様な人材の確保・対流の促進」を掲げ、その中でインフラツアーを展開している。北海道インフラPR実行委員会を組織し、その下で平成30年度には5つの地方ツアーが計画されて、計9回の実施をみた。

これまで北海道では北海道遺産を発端として10年ほど前から、バス会社が企画するインフラツアーとして道東のタウシュベツ川橋梁を訪ねるツアーが催行されてきた。この橋はダム湖に沈むことで凍結融解現象が激烈に進行し毎年、見られる姿が変化することから多くのリピーターを捕まえた格好である。このほかでは小樽の建築群と北防波堤を併せて訪ねるツアー、空知の炭鉱群のツアー等があった。これに土木学会の土木遺産ツアーが加わった。国でも施設を開放(監査路の見学、船等の利用許可)することで、ツアーでの活用を後押ししてきた。

そしてH30年度となり上記の国の取り組みがあり、11月に第3回の北海道遺産が発表され、15件中のうち約半数の7件に土木に関連するものが入り、今後の活用が期待されることである。

土木学会北海道支部では企画商品としての土木遺産ツ

アーの他にも親子見学ツアーを毎年開催しており、バス2台分を集めて盛況であるほか、生涯学習講座と絡めたバスツアーも実施している。また、バスを離れて個人のインフラ見学を誘発させる仕組みとして、土木遺産カードを企画している。これは土木施設の近くで配布し、ホームページ、SNSと連動させてカード収集がインフラを知る行動につながるよう誘導させる取り組みである。

3. 社会インフラツアーの設計

3.1 H30年ツアー

札幌発着の土木遺産ツアーとして今年で9回を数えることからネタ切れの感があり、今年度土木遺産に選奨された「山線鉄橋」を軸にツアーを構成した。この土木遺産の近くに「千歳川の王子製紙水力発電施設群」があり両遺産が王子に関係するため、当初は製紙業(林業、鉄道、川、発電、港)を軸に企画を進めた。

図1 ツアー・チラシ (H30 土木遺産ツアー)

地域情報番組や歴史番組とタイアップしたツアーの開催。